

幼児における空想／現実の区別課題の検討

大田 紀子¹・杉村伸一郎²

Examination of young children's fantasy-reality distinction task

Noriko Ota¹, Shinichiro Sugimura²

Abstract : This study used two different contents of the fantasy-reality distinction tasks to examine about more precisely fantasy-reality distinction task. The different contents were color of picture (color print or monochrome print) and instruction. Participants were 3 to 5-year olds preschoolers. The results were follows. (1) It was suggested that it is preferable to use the picture printed monochrome because there is a possibility that young children's understanding of the fantasy-reality distinction is influenced by color of picture. (2) As for the instruction about the content of the presented picture, it was suggested that it is preferable to instruct children including “happen in real life” and “happen only in the picture book”.

Key Words : fantasy-reality distinction task, young children

目 的

子どもはしばしばファンタジーの世界の住人であると言われ、その世界をリアルにありありと体験している。実際、子どもの多くは2歳頃までにごっこ遊びを始める。その後ファンタジー的な遊びや活動はますます活発に行われるようになり、就学前に最盛期を迎えると言われている。初期の研究では、空想 (fantasy) は現実逃避など否定的な見方が優勢であったと言われている (Person, 1995/1997)。しかし、そのような見方は見直され、人間の生活や人格発達において重要な役割を果たすといった見方がなされるようになった (Singer & Singer, 1990/1997)。

幼児期における空想と現実の認識を扱った研究は、その興味関心によって様々な方法論が用いられている。その代表的なもの1つに、Taylor & Howell (1973) をはじめとする、絵本の絵を材料とした空想／現実の区別課題を用い

た研究がある。彼らは、この課題を用いて幼児期における空想世界と現実世界を区別する能力の発達を調べている。Table 1は、空想／現実の区別課題を用いた研究の概要を示したものである。

Taylor & Howell (1973) は、様々な絵本の中から、空想的な絵6枚と現実的な絵6枚を選び出し、3～5歳の幼児にそれぞれの絵に描かれている事象が本当に起こると思うかどうかを尋ねた。その結果、現実的な絵に関しては、3歳でもほとんどの幼児が“本当に起こる”と正しく判断できたのに対して、空想的な絵では、現実には起こり得ない事象を“本当に起こる”と誤って判断する幼児が多く見られた。空想的な絵に対する正答率は、3歳児から順に12%、43%、77%であり、4歳児でもその答えに確信が持てないようであった。しかし、5歳児になると成績は大きく向上し、空想と現実の区別がより安定的に行えるようになることが示唆されている。

次に、Morison & Gardner (1978) は、空想的な絵と現実的な絵を各10枚ずつ計20枚の絵を使用して、それらに描かれている事象が本当か、

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

Table 1 空想/現実区別課題を用いた先行研究の概要

研究者 (年)	対象	材料		教示	結果 (正答率)	
		内容	色		空想	現実
Taylor & Howell (1973)	3-5歳児各26名	空想的な絵 (人間のようない動物), 現実的な絵 (普通の人間もしくは動物) 各6枚 (計12枚)	不明	「絵の中で何が起きていると思う?」, 「それは本当に起きていると思う?」	3歳児: 12% 4歳児: 43% 5歳児: 77%	
Morison & Gardner (1978)	幼稚園児, 小学2年生, 4年生, 6年生各20名	空想的な絵, 現実的な絵, 各10枚 (計20枚)	不明	絵を本当 (real) かふり (pretend) で分類。		幼稚園児: 70% 2年生: 87% 4年生: 91% 6年生: 97%
Samuels & Taylor (1994) ¹⁾	3・4歳児30名 (平均年齢: 3歳10か月) 4・5歳児32名 (平均年齢: 5歳0か月)	恐怖喚起有群—恐怖喚起のある空想的な絵, 現実的な絵, 各5枚 (計10枚) 恐怖喚起無群—恐怖喚起のない空想的な絵, 現実的な絵, 各5枚 (計10枚)	不明 (photocopied)	絵に描かれている事象で何が起きているかを尋ねた後, (1) 「これは現実で起きている?」, (2) 「どうしてそう思う?」, (3) 「これは夢の中で起きている?」	3・4歳児: 45% 4・5歳児: 76%	3・4歳児: 67% 4・5歳児: 61%
富田 (2004)	年中児50名 (平均年齢: 5歳0か月)	空想的な絵, 現実的な絵, 各6枚 (計12枚)	モノクロ	「本当に起きたっておかしくない」, 「本当に起きたらおかしい」を○×でカード選択。	55%	61%
富田・原 (2006)	年少児24名 (平均年齢: 3歳7か月) 年中児31名 (平均年齢: 4歳7か月) 年長児34名 (平均年齢: 5歳6か月)	空想的な絵 (人間のようない動物, 架空の生き物, 魔法を使う人間, 各4枚) 12枚, 現実的な絵 (普通の人間, 普通の動物, 各4枚) 8枚 (計20枚)	モノクロ	「本当に起きていること」, 「夢の中や絵本の世界でしか起これないこと」を○×でカードで選択。全ての絵ではなく, 数回ラシダムに選択理由を尋ねる。	年少児: 59% 年中児: 61% 年長児: 81%	年少児: 54% 年中児: 73% 年長児: 79%

¹⁾ 各正答率は, 恐怖喚起の有無による2つの群を込みにした結果である。

それともふりであるかを尋ねた。彼らは、年齢範囲を広げて、幼稚園児、小学2年生、4年生、6年生にこの区別課題を行った結果、幼稚園児で70%が正しく判断を行うことができた。ただし、空想と現実の認識はまだ十分とはいえず、児童期を通じて発達し続けると述べている。

さらに、Samuels & Taylor (1994) は、Taylor & Howell (1973) の課題を若干修正し、3・4歳児、4・5歳児を対象に空想と現実の区別能力を再度検討した。結果は、4・5歳児で76%であり、先行研究を一致するものであった。また、材料の絵が恐怖を喚起させる内容であった場合、現実では起こり得ると考えられる現実的な絵に描かれている事象も“本当に起こらない”と誤って判断してしまうという、感情喚起の影響も示唆している。

日本国内においても空想／現実の区別課題を用いた研究はいくつかある。富田 (2004) は、年中児に対して空想／現実の区別課題を行い、想像の現実性判断との関連を調べている。その結果、想像したことが現実になるかもしれないというような想像の現実性判断における揺らぎには、空想と現実の区別に関する認識が関連していることが明らかにされた。

また、富田・原 (2006) は、年少児、年中児、年長児を対象に、材料となる絵を空想的、もしくは現実的という単純な分類ではなく、それぞれをより詳細にタイプ分けした絵を用いて検討を行っている。空想的な絵として、①人間のような動物、②架空の生き物、③魔法を使う人間、現実的な絵として④普通の人間、⑤普通の動物という各4枚ずつ計20枚の絵について、“本当に起こること”か“夢の中や絵本の世界でしか起こらないこと”なのかを尋ねた。結果は、年少児ではまだ不安定であった空想と現実の認識が、年長までに安定的になるという、先行研究の結果と一致したものであった。また、空想の存在のタイプによる認識の差異にも言及している。人間のように言葉を話し行動する動物が登場する事象は魔法を使って空を飛んだりする人間が登場する事象よりも、幼児にとって“本当に起こる”と判断されがちであった。この結果は、材料となる絵を詳細なタイプ分けによって選出する必要性を示唆していると言えよう。

この他にも、幼児期における不思議な現象(手品)を見せられた時の不思議を楽しむ心の発達と空想／現実の区別能力の発達の関連を調べた研究(富田, 2009)があるが、富田・原

(2006) で使用されたデータの再分析であり、結果もほぼ同じであったためTable 1からは割愛した。

以上のように、空想／現実の区別課題は、幼児期、児童期における空想と現実の認識を検討するためだけでなく、他の認識との関連を検討するためにも広く利用されている。近年、子ども時代の想像力やファンタジーに関する研究は幅広く行われており、それらを多面的に検討する目的で今後も空想／現実の区別課題は多くの研究者によって利用されると考えられる。

しかしながらこの課題は、使用される絵に關しての詳細な説明(例えば、カラーなのかモノクロなのか)がない先行研究も少なくない。絵本の絵の性質が幼児の想像力に影響を及ぼすことが中澤ら(2005)によって言及されている。彼らは、色調が明るくかわいいイメージの絵は幼児の想像力を抑制すると述べている。そうであるならば、空想／現実の区別課題で使用される絵がカラーなのかモノクロなのかによって、幼児の判断にも少なからず影響が出ると予想される。

また、教示に関しても同様のことが言え、使用する研究者によって言い回しが微妙に異なり、それが幼児の判断に影響することも推察される。今回レビューした研究は、大まかには“本当に(現実)に起こるかどうか”を一方的に尋ねる場合と“夢や絵本の世界でしか起こらないのか”を先述した質問と同時に尋ねる場合の2種類に分けられる。Harris (2000) は、Subbotsky (1994) の研究を引用しながら、子どもはおとぎ話の特別な慣習を認識し、現実では起こり得ない不可能な変化が生じるのはおとぎ話の世界に限られているということを認識していると述べている。このことから、教示の中で“夢や絵本の中でしか起こらない”ということが示される場合とそうでない場合では、幼児の判断に違いが出てくるとと思われる。

よって本研究では、従来行われてきた空想／現実の区別課題を踏襲し、方法を若干変えた(絵の色、教示)2種類の課題を同一の参加者に期間をあけて実施する。その結果から、より精度の高い空想／現実の区別課題について検討することを目的とする。そうすることによって、今後、空想／現実の区別課題を使用する際の資料としての役割を担うことができると期待される。

Table 2 絵の内容 (課題1)

空想的な絵		現実的な絵	
人間のような動物	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤギが牛乳配達をしている ・いろいろな動物がバスに乗っている 	普通の人間と動物	<ul style="list-style-type: none"> ・少女が老人と話をしている ・子どもがおもちゃで遊んでいる ・子どもが校庭で遊んでいる ・子どもがチャンバラをしている ・ウサギが草を食べている ・カブトムシが戦いをしている
架空の生き物	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの前におばけが現れる ・怪物が子どもをおどかしている 		
人間の姿をした 架空の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・巨人が城の側に立っている ・魔法使いがほうきに乗っている 		

Table 3 絵の内容 (課題2)

空想的な絵		現実的な絵	
人間のような動物	<ul style="list-style-type: none"> ・キツネがバス停でバスを待っている ・いろいろな動物がプールで泳いでいる 	普通の人間と動物	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが人形で遊んでいる ・子どもがスケッチをしている ・女の子が犬の散歩をしている ・人々が動物園のゾウを見ている ・男の子が馬小屋の前を通っている ・動物園でペンギンが立っている
架空の生き物	<ul style="list-style-type: none"> ・おばけが子どもの前に現れる ・怪物が森の中を歩いている 		
人間の姿をした 架空の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・巨人と妖精が食事をしている ・魔法使いがほうきに乗っている 		

方 法

課題1

対象 保育園の年少児31名(平均年齢3歳10ヶ月)、年中児25名(平均年齢4歳10ヶ月)、年長児30名(平均年齢5歳9か月)の計86名であった。

材料 富田・原(2006)を参考にして絵本から選出した空想的な絵6枚と現実的な絵6枚の計12枚を材料とし、A4判の用紙にカラー印刷したものを用いた。絵の内容をTable 2に示した。

手続き 保育園の静かな部屋で個別に行った。実験者は参加者に○と×が描かれた2枚のカードを提示し、提示する絵が「本当に起きてもおかしくない」と思えば○、「本当に起きたらおかしい」と思えば×のカードの上に手を置くように教示した。カードの上に手を置く練習をした後、課題とは無関係の2枚の絵による練習課題を行った後、本課題として12枚の絵をランダムに提示した。

課題2

対象 課題1と同一の参加者に3か月後に実施した。

材料 基本的には課題1と同じであるが、以下のように変更した。絵はカラー印刷ではなく、モノクロ印刷したものを用いた。絵の内容をTable 3に示した。実験のはじめに、提示する絵の内容は、「本当に起こること」、「絵本や夢

の中でしか起こらないこと」が含まれることを伝えた。絵を見て、「本当に起こる」と思ったら○のカード、「絵本や夢の中でしか起こらない」と思ったら×のカードの上に手を置くよう教示した。

結 果

課題1

参加者の回答は、空想的な絵に対して現実に起こりえないと判断した場合を1点、現実に起こり得ると判断した場合を0点とし、現実的な絵に関してはこの逆で得点化した(得点範囲: 0~6点)。正答率は、空想の絵で年少児から順に43%, 45%, 55%, 現実の絵で67%, 70%, 71%であった。3(年齢)×2(空想/現実)の分散分析を行った結果、課題(空想/現実)の主効果が有意であった($F(1, 83) = 19.22, p < .01$)。多重比較を行った結果、空想的な絵を現実には起こり得ないと判断するよりも、現実的な絵を現実に起こり得ると判断するほうが容易なようであった($p < .05$)。年齢間に有意な差は見られなかった。この結果は、年齢が上がるにつれて空想と現実の区別の認識が発達するという先行研究(Taylor & Howell, 1973; Samuels & Taylor, 1994; 富田・原, 2006)の結果とは異なるものであった。

課題2

正答率は、空想の絵で年少児から順に40%, 53%, 67%, 現実の絵で64%, 65%, 71%であ

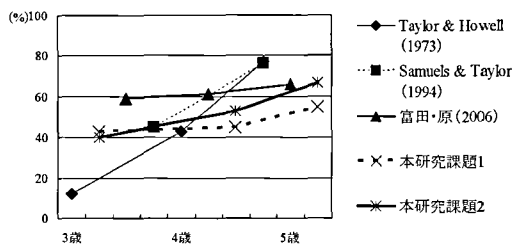


Figure1 空想/現実区別能力の発達の推移

った。3 (年齢) × 2 (空想/現実) の分散分析を行った結果、年齢の主効果 ($F(1, 83) = 8.70, p < .01$) と課題 (空想/現実) の主効果 ($F(1, 83) = 12.53, p < .01$) が有意であった。多重比較を行った結果、年長児は年少児よりも空想と現実の区別が安定的に行えること、空想的な絵を現実には起こり得ないと判断するよりも、現実的な絵を現実には起こり得ると判断するほうが容易なことが示唆された ($p < .05$)。これらの結果は、はじめ曖昧であった空想と現実の区別が幼児後期には安定的に行えるようになることを示唆するものであり、先行研究の結果 (Taylor & Howell, 1973; Samuels & Taylor, 1994; 富田・原, 2006) とも一致している。

考察

本研究と先行研究の結果を踏まえ、空想/現実の区別課題での空想的な絵に対する正答率を従属変数とし、幼児の空想と現実の区別能力の発達の推移をFigure 1にまとめた。以下では、課題の内容の違いをもとに考察を進めていく。
絵の色の違い

課題1ではカラー印刷した絵、課題2ではモノクロ印刷した絵を使用した。先行研究において、使用した絵本の絵の複写方法についての記述があるのは、フォトコピーというSamuels & Taylor (1994) のみである。しかしながらそれも、カラーなのかモノクロなのかについては明記されていない。従って、課題成績が絵の色によって明らかに変化するとまでは言い難いが、同じモノクロ印刷した絵を使用した本研究の課題2と富田・原 (2006) の空想と現実の区別能力の発達の推移が同様の傾向を示したことから、絵の色は不明であるがTaylor & Howell (1973)、Samuels & Taylor (1994) の結果とも同様の傾向を示していることから、使用される絵の色によって幼児の認識が影響を受ける可能性があることが示唆される。また、唯一先行研究とは異なる

傾向を示した本研究の課題1はカラー印刷した絵を使用しており、中澤ら (2005) が示唆したように、色彩の施された絵によって幼児の認識が影響を受けたと考えられる。

教示の違い

課題1では、“本当に起きてもおかしくない”、“本当に起きたらおかしい”ということカード選択させる形で行った。これに対して課題2では、提示する絵の内容は“本当にも起こること”、“絵本や夢の中でしか起こらないこと”が含まれることを告げた上で、そのどちらかをカード選択させた。結果は、これまで述べてきたように、後者のような教示を行った課題2が先行研究の結果と一致するものであった。この違いは、特に空想的な絵の判断に関して顕著であった。これは、4・5・6歳児に人間の手が壁を通り抜けることが可能かどうか、人間や物が若返ったり新しくなったりするような変化が可能かどうか、またそうしたことがおとぎ話の世界ではどうかということを探ね、幼児が現実世界とおとぎ話の世界を区別できているというSubbotsky (1994) の研究結果からも納得のいくものである。幼児が課題で使用される空想的な絵の内容を、絵本の世界でなら起こり得ると理解していると仮定すると、幼児期の空想と現実の認識を測定するためには、課題2で使用したような教示がよりふさわしいと考えられる。
まとめ

本研究は、より精度の高い空想/現実の区別課題について検討するため、幼児を対象に内容の異なる2つの空想/現実の区別課題を実施した。内容の違いとは、絵の色 (カラー、モノクロ) と教示であった。課題1と課題2では、大部分の絵の内容も異なっていたが、空想的な絵、現実的な絵それぞれの詳細なタイプ分けは同質であり、何枚かは同じ絵が含まれていた。その結果、課題2は先行研究の結果と一致するものであったが、課題1は先行研究のそれとは異なるものであった。この結果から、空想/現実の区別課題の実施に関して、(1) 絵の色によって幼児の認識が影響を受ける可能性があるため、モノクロ印刷した絵を使用することが望ましいこと、(2) 教示は提示する絵の内容に関して“本当 (現実) にも起こること”、“絵本の中でしか起こらないこと”を示すことを含めて行うことが望ましいということが示唆された。

今後も幼児期、児童期のファンタジーや想像力に関する研究において使用されることが予想

される空想／現実の区別課題であるが、材料となる絵の内容だけでなく、先述したような点も考慮に入れることによって、再現性のあるより精度の高い課題となるであろう。

謝 辞

調査にご協力いただいた保育園の先生方、園児の皆様にご心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Harris, P. L. (2000). *The work of the Imagination* Blackwell Publishers Ltd.
- Morison, P., & Gardner, H. (1978). Dragons and dinosaurs : The children's capacity to differentiate fantasy from reality. *Child Development*, **73**, 1688-1702.
- 中澤潤・中道圭人・大澤紀代子・針谷洋美. (2005). 絵本の絵が幼児の物語理解・想像力に及ぼす影響. *千葉大学教育学部研究紀要*, **53**, 193-202.
- Person, E. S. (1997). 人はなぜ空想するのか (岡昌之・浅尾泰, 訳). 翔泳社. (Person, E. S. (1997). *By force of fantasy : How we make our lives*. Faber and Faber Ltd.)
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417-427.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. (1997). 遊びがひらく想像力 (高橋たまき・無藤隆・戸田須恵子・新谷和代, 訳). 新曜社. (Singer, D. G., & Singer, J. L. (1990). *The house of make-believe : Children's play and developing imagination*. Harvard University Press.)
- Subbotsky, E. (1994). Early rationality and magical Thinking in preschoolers : Space and time. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 97-108.
- Taylor, B. J., & Howell, R. J. (1973). The ability of three-, four-, and five-year-children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315-318.
- 富田昌平. (2004). 幼児における想像の現実性判断と空想／現実の区別認識との関連. *発達心理学研究*, **15**, 230-240.
- 富田昌平・原充代. (2006). 幼児における空想／現実の区別の認識. *幼年教育研究年報*, **28**, 51-56.
- 富田昌平. (2010). 幼児期における不思議を楽しむ心の発達：手品に対する反応の分析から. *発達心理学研究*, **20**, 86-95.